月影

第65号

令和元年十二月一日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院

うらをみせ
おもてをみせて
散るもみじ

良寛

あざやかに
赤や黄になる
もみじにも

あざやかではない
うらの姿がある

おもても
うらも
同じもみじ

偽りのない姿で
散るもみじの美しさ

開宗八五〇年 法然上人の生涯

【二】父との別れ

夜襲

父、時国のもとで、武士として育っていた勢至丸（法然上人）が九歳になった頃、人生を変えた悲劇が起こります。

日頃から時国と対立をしていた明石源内武者定明（あかしのげんないむしゃさだあきら）が手勢を率いて夜襲をかけてきたのです。

この夜襲で、父、時国は瀕死の重傷を負い、重体になります。

父の遺言

瀕死の状態の時国は、勢至丸を枕元に呼び寄せ、次のような遺言を遺します。

「決して敵を恨んではならない。これは前世からの因縁である。お前が恨みを持って仇討ちをすれば、また敵も恨みをもって仇討ちに来るだろう。争いは末世まで繰り返されることになる。そなたは、出家して僧となり、私の菩提を弔ってくれ」と。

そう言い残すと、父は息を引き取りました。

この父の遺言によって、法然上人は出家を志すことになります。

母との別れ

比叡山へ

勢至丸（法然上人）の出家により、一家は離散し、勢至丸は父の遺言を胸に、叔父である観覚の弟子となりました。

比叡山や南都で学んだ僧侶であった観覚は、勢至丸に仏教の手ほどきをするうちに、勢至丸の優秀で非凡な才能に驚きました。

「この才能を美作に埋もれさせるのはもったいない」と思い、当時の最高学府であった比叡山延暦寺で仏道修行を積ませてやりたいと考えました。

勢至丸は比叡山で修行したいと母を説得します。母はその思いを受け止め、涙ながらに比叡山へ行くことを許したそうです。

当時、「比叡山に登る」ということは、「一生の別れ」を意味していました。

勢至丸、わずか十三歳のことでした。（十五歳の説あり）

比叡山

永観堂だより

降誕会（ごうたんえ）

毎年十一月九日は、本山の永観堂禅林寺で降誕会（ごうたんえ）の法要が厳修されます。降誕会とは、我が宗派の祖である西山上人（せいざんしょうにん）の生誕を祝う法要です。

西山上人は十四歳の時法然上人に弟子入りし、法然上人がお亡くなりになるまでお仕えされました。法然上人亡き後は、京都の西山（にしやま）の三鈷寺に住まわれ念仏の教えを広められました。

そして、いつしか「西山におられる上人」が「西山上人（せいざんしょうにん）」とお呼びするようになりました。

現在、西山上人の流れをくむ宗派と本山は、浄土宗西山禅林寺派の永観堂、西山浄土宗の粟生の光明寺、浄土宗西山深草派の新京極の誓願寺の三派です。

仏教用語

邪魔（じゃま）

「じゃまもの扱い」「じゃまが入る」「じゃま者」。また、「おじゃまします」など、相手をさまたげることをわびる言葉です。本来はさとりをさまたげる邪悪な悪魔のことで、お釈迦様の成道（さとりを開く）前に現れ、さまたげた波旬（はじゅん）という邪魔のこと。お釈迦様が入滅する前に早く世を去るように誘惑したのもこの邪魔。「魔」はサンスクリット語のマーラを音写する際に、マの音を表わす為に中国で新しく漢字を作り当てたので「魔」の字には本来意味はありません。

仏教歳時記

成道会（じょうどうえ）　支度（したく）の和尚（おしょう）　落葉（おちば）掃く

宇野憑子

成道会（じょうどうえ）とは、お釈迦様が菩提樹の下で悟りを開いたとされる十二月八日に勤められる法要のことです。

成道会は、お釈迦様の誕生を祝う四月八日の仏生会（花まつり）、そして、お釈迦様の入滅の日、旧暦二月十五日の涅槃会（ねはんえ）と共に三大法会の一つです。

雑記抄　～仏の子～

〈俺に似ろ　俺に似るな　子を思い〉。以前どこかで見かけ、なるほどと思わされた句です◇日々、一喜一憂しながら子育てをしている方は多いかと思いますが、我が子の様子に自分と似ている所があるとうれしくなります。でもここは似てほしくないと思う部分を見つけた時、子どもに申し訳ない気持ちになります◇〈子は褒めて育てよ〉といわれるように、できるだけ褒めようと努めても、目につく所は良くない部分ばかり。なかなか良い所を見つけることは難しいものです◇仏教に「一切衆生　悉有仏性（いっさいしゅじょう　しつうぶっしょう）」という言葉があります。「すべての生きとし生けるものには、仏になりうる素質がある」という意味です◇子の「良さを見つける」ことは、本来そなわっている「仏の素質」を見つけること。そして「褒める」ことは、その「仏の素質」を伸ばすこと。つまり、「褒めて育てる」ことは、仏さまのようにやさしい子に育てることにつながるような気がします◇子に限らず、大人も褒め合うことは大切です。何歳になっても褒められるとうれしいものです。私たちは仏の子なのです。